

「市民から市民への21の提案」実現に向けた取組について

【提案⑳】

独居高齢者、老々介護、介護離職など、様々な介護の事情や社会生活環境の変化をふまえ、担い手の多様化と地域での支え合いの仕組みをつくろう

自治基本条例推進委員会 第5班

浅野 美誉子

大槻 泉

西濱 早織

【提案②】

独居高齢者、老々介護、介護離職など、様々な介護の事情や社会生活環境の変化をふまえ、担い手の多様化と地域での支え合いの仕組みをつくろう



取組を考えるうえで、まずは提案文のなかにある**キーワード**を見つけ、一つずつ考えてみることに

【キーワード】

- 1 **介護の事情や社会生活環境の変化**
- 2 **担い手の多様化**
- 3 **地域での支え合いの仕組み**

【キーワード1】「介護の事情や社会生活環境の変化」について考察

【変化の背景と課題を考察】

①少子高齢化社会の進展

- ⇒ 独居高齢者、認知症高齢者、要支援・要介護者の増加
- ⇒ 一方で少子化により介護者は減少、介護離職やヤングケアラーが増加

課題

介護の事情
の変化

②介護人材不足

- ⇒ 介護保険サービスを受けれない、サービスの低下
- ⇒ 家族介護者の負担増

課題

③情報化社会の進展、働き方の変化

- ⇒ インターネットやSNSなどの普及、共働き世帯の増加等により、人々の価値観や生活様式は多様化
- ⇒ 地域コミュニティの希薄化、サロンや老人クラブ等の会員の減少、地域の担い手の減少

課題

社会生活環境
の変化



課題が変化しているなら、これまでの取組も変化させなければならない？

これまでの担い手と、これからの担い手

地域の担い手は前期高齢者（65歳～74歳）がメイン層となっている。しかし、「2025年問題」と言われるように、人口の多かったこれらの年齢層は今後後期高齢者へと変わり、介護や支援が必要な方は急増していく。併せて、介護をめぐる状況は複雑化、多様化するなかで、ますます担い手の確保が求められる。

担い手の多様化は可能？

若者・学生、働き世代、子育て世代、高齢者、男性・女性・・・

若者・学生 ⇒ 勉強が忙しい、興味・関心がない

働き世代・子育て世代 ⇒ 仕事、子育てで毎日の生活が精一杯

高齢者 ⇒ 近年は退職後も再雇用等で働く方が増加、親の介護が大変

※高齢者の就労率は65歳～69歳で50.3%、70歳以上で18.1%
（総務省統計局参照）

男性 ⇒ 自治会長（326自治会）はこれまでほぼ全て男性

女性 ⇒ 民生委員は女性が多い（女性3：男性2）



担い手を多様化させることは難しい？例えば、担い手のメインターゲットは、退職後で次のライフスタイルを模索する方やこれまで職場しかつながりがなく、新たなコミュニティを求めている方などとしつつ、新たな担い手として、他の世代を巻き込んでいくには？

【キーワード3】「地域の支え合いの仕組み」について考察



「地域の支え合いの仕組み」って、
・難しそう、時間がかかりそう
・大きな仕組みを作らないといけない？
・担い手の負担が大きそう



提案は、
地域住民「全員」が、「気軽」に、
「支え合える仕組み」としたい。

議論のなかでは、以下のような意見がでました。

- ・地域で支え合う以外に、介護保険サービスを上手に活用することで、解決できることも。
しかし、地域包括支援センターにはどうしてもなくなってからくる方も多く、事前に相談できるよう周知する必要があるが、行政からのお知らせは読まない方も多い。
- ・一方で有効なのは口コミ。例えばサロンの集まりに地域包括支援センターの職員に来てもらい、様々なサービスを教えていただき、それを参加者が地域に口コミとして情報を広げていくことも有効ではないか。
- ・同じ高齢者同士で「あんたもサービス受けれるで」、「包括行ってき」と言える関係性。
「あの人連れてこない」というおせっかいが大切。



特定の人だけが支える仕組みではなく、口コミ・おせっかいも立派な支え合いになるのでは？

★「やらなければならない」から「やりたい！」へ

⇒地域の活動といえば、自治会、公民館、サロン、老人クラブetc・・・。

近年は加入者が減少しており、その大きな要因の一つが「負担感」。何かに所属すれば役を担わされたり、責任が生じたりする「負担感」から参加を避けがちに。負担のない活動にするためにしたい。

★「楽しい！」を原動力に

⇒多様性が叫ばれる昨今、インターネットやSNSの普及により価値観も多様化。個々人の活動範囲も学校、職場、近所から全世界に。

多様な担い手が生まれるには、それぞれが「楽しい！」と思える活動に参加できることが理想。地縁だけにとらわれない交流の場を考えられないか。

★「おせっかい」が地域を救う!?

⇒情報化社会のなかで情報弱者ともいわれる高齢者。受けるべきサービスを受けないで負担になっている場合も。

地域のおせっかいさんが広める口コミやお誘いが地域全体に広がり、住民全体で支え合う地域を実現できないか。

提案②を実現するための取組の提案（新しい支え合いの仕組み）

提案 1

地域を超えた集まり つながりの場の創出

- ・地縁ベースの集まりから、地域を超え、好きなことをする人の集まりを創出。
- ・市内のサロンで交流会を実施。それぞれの活動内容を紹介するなど、新しいつながりの場を創出。それぞれの取組をつなげるマッチングを行う。
- ・市内各地域から人と情報が集まり、そこで得た情報は地域に持って帰り、口コミで地域に還元。情報の循環を生む。

提案 2

リーダーや役を作らない 新しい集まりの場の運営の創出

- ・ある地域のサロンではリーダーを決めずに運営。リーダーを決めるとその人の負担や責任が生じるため、皆で好きなことをアイデアを出し合って決めている。できる人がやる、できないことはやらない。
- ・上記のようなモデルケースを市内のサロンや団体にも紹介するため、運営方法や取組内容をまとめた広報物を作成し、関係団体にも御協力いただきながら配布や周知を行う。

